

ブックデザインにおけるプリプレスからポストプレスまでの再考と実践

RECONSIDERATION AND PRACTICE FROM
PREPRESS TO POSTPRESS IN BOOK DESIGN

萩原 小麻紀 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 助教
 尹 智博 大学院芸術工学研究科 助教
 崔 琴美 元・芸術工学部ビジュアルデザイン学科 実習助手

Komaki HAGIWARA Department of Visual Design, School of Arts and Design, Assistant Professor
 Jibak YOON Graduate School of Arts and Design, Assistant Professor
 Kummi CHOI Department of Visual Design, School of Arts and Design, Former Assistant

要旨

本研究はコンピュータのみで完結するデザインプロセスを見直し、現在のさまざまなデジタル技術と、人の手作業の関係性を探ることで、ブックデザインの新たな魅力に迫ることを目指した。素材としての紙の考察や、文字や図版などの要素がページに定着される印刷の手法、そしてそれらを束ねる造本に至るまで、ひとつひとつを思考し実践した。

2015年に東京で開催された、壺井栄の作品を題材としたブックデザインの企画展に参加したことを契機に、本の制作だけでなく、文学と人を地域で繋ぐことを考え始めた。2016年には小豆島でも、内容を更新した展示を実施。観光客だけでなく、壺井作品を読んだことがない地元の若者にも、本研究の成果物を通して、作家や作品の魅力に触れてもらい、小豆島を描いた文学作品を、後世に繋げていく機会を設けた。

東京・小豆島での展示を経て、2017年には神戸で展示を開催。これまでに出展者が取り組んだ「今つくる、本の形」を振り返り、その制作プロセスなどを公開した。さまざまなデザインの試行を見てもらうと同時に、地域編集の実践に触れてもらうことを目指した。さらに会期中には神戸の古書店 5 店舗に協力を依頼し、展示会場と書店を回遊してもらうことで、神戸の街と人と本を結ぶ企画に取り組んだ。

Summary

We reviewed and considered the design process which is completed only with computers. Also we searched the relation between the variety of digital techniques and manual operations in this research. We aimed for discovering the attractivenesses of book designing. As examples of our considerations, an observation of papers which are handled for the materials of book design, printing methods especially for lettering and illustrating, also bookbinding to bundle the books. We discussed and practised each their works minutely.

We joined the book design exhibition, which was themed on literary work of Sakae Tsuboi (1899-1967) who was a Japanese novelist and born in Shodoshima-island in Kagawa Prefecture, in Tokyo in 2015. After the participation, we have begun to try thinking not only book designing but also we have made to deepen the bonds between literature and people locally. In 2016, also we have given an upgraded exhibition in Shodoshima-island, of the same subject as in Tokyo.

After exhibitions in Tokyo and Shodoshima, also we held an exhibition in Kobe. We were looking back our artistic work which is named “The footprint of book designing, and now here we are standing” and we presented the creative processes to the public. Several types of our challenge for the community-based work were open for visitors. The aiming was to get close the distance between editing, book designing and people specifically for indigenous. In addition, we requested a collaboration for 5 long-established bookstores based in Kobe and consequently, our guests were pleased not only the exhibition but also good-old bookstores. We were able to make a positive connection with Kobe, books and local people as a result of our exhibition and work.

研究の背景と動機

DTP の普及により、デザインワークにおいてコンピュータの存在は欠かせないものになった。現在では簡単に印刷物を制作・発注できるシステムが整い、専門的な知識を持たなくても、あらかじめ用意された既成のフォーマットに沿って、さまざまな印刷物を容易に作り出すことが可能である。作業効率の向上による恩恵を受ける一方、画一的な印刷物が氾濫する現状には違和感を覚えていた。

この問題意識に、自らが取り組むきっかけとなったのは、2015 年度に壺井栄を題材とした本を制作し、展示をする機会を得たことだった(「壺井栄の唄—今つくる、本の形」2015 年 10 月 6 日～11 日 森岡書店 銀座店)。

壺井は 1930 年代後半から 1960 年代前半にかけて、主に児童文学の領域で多くの作品を残した作家である。壺井作品のリサーチを進めるうちに、初期作品や関連書籍などさまざまな年代に出版された本を手にする機会が増えた。その年代によって、素材や印刷手法は異なり、人間の手や目は些細な質感の違いや、歪みやズレなどに対し、敏感に反応することに気付いた。既に出版されている文学作品をリ・デザインし、現代に発信する意味を考えたとき、今回の研究テーマのポイントである「素材」「印刷」「造本」を見直すことが、ブックデザインの魅力に繋がると考えた。

小豆島での企画展

東京での展示の後「壺井栄 50 回忌記念事業」の一企画として、再びブックデザイン展に参加する機会を得た(「壺井栄の唄—今つくる、本の形」2016 年 10 月 1 日～31 日 岬の分教場)。東京展では、出展者の制作した本のデザインが似通ってしまい、一見すると幅が狭く、限定された領域のように感じられた。小豆島展ではその反省もふまえ、レイアウトだけに捕われるのではなく、素材や人の手作業が介在することによって立ち上がってくるブックデザインを目指した。さまざまな技術やシステムを否定するのではなく、それらを柔軟に取り入れながら、応用・発展させることで、本の別の在りかたが見出せると考えた。また出展者同士の制作の方向性についても、幅がでるように確認し合いながら進めた。

テキストの選定

使用テキストは壺井栄の『ダリヤ』『やぶかんぞう』『花の旅路』『木の葉のように』『柚の大馬鹿』の 5 作品とした。著者が若者に向けて書いた文学作品を中心とし、展示会場でも読了しやすいように、文字量の少ない短編作品を選定した。

素材や印刷表現の研究と実践

本は「テキスト+イラストレーション」で構成した。さまざまな手法や画材で制作された図版を用いることにより、素材や印刷の試行に幅がでると考え、作品ごとに異なるイラストレーターに依頼した。

『ダリヤ』(図 1)では、漫画のコマのように枠をつけてイラストレーションを描いてもらい、そのあいだに文字を配置していった。物語の雨のイメージをページに表現するために、本文用紙に蠟引き加工を部分的に施している。綴じ方は組継ぎ本でおこなった。

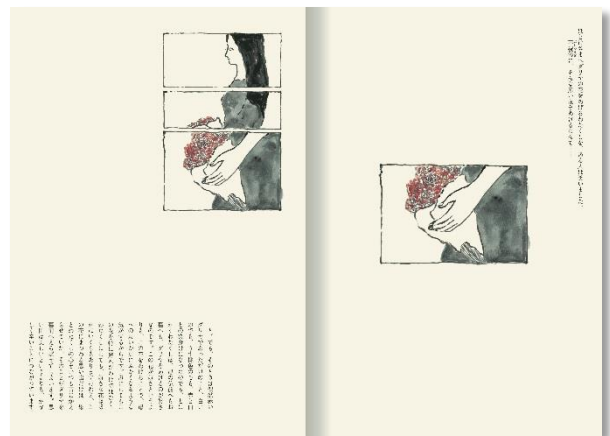


図 1『ダリヤ』

底本：『小さな花の物語』、平凡出版、昭和 32 年

判型：幅 145×高さ 210mm イラストレーション：長松朋美

『花の旅路』(図 2)では、墨のイラストレーションと、それとは対照的に、さまざまな色や質感の紙を貼り合わせて、料紙のような本文用紙を制作した。

『木の葉のように』(図 3)では、葉脈のイラストレーションを木の板に描き写し、彫刻刀でそれを彫って木版を自作。本文用紙に彫った葉脈を刷り、紙そのものを木の葉にみたてた。

『やぶかんぞう』(図4)では、組継ぎでの製本に加え、表紙部分のトレーシングペーパーを、家庭用のミシンを用いて繋ぎ合わせる製本を行った。

『柚の大馬鹿』(図5)では、刊本に印刷された文字を拡大コピーし、1文字ずつ切り貼りをした。テキストに絡み付くように、小さなイラストレーションが散りばめられた組版デザインに仕上げた。それを再度スキャンし、プリンタで印刷をおこなった。



図2『花の旅路』

底本：『壺井栄全集9』、筑摩書房、昭和44年

判型：幅252×高さ165mm イラストレーション：細見安里



図3『木の葉のように』

底本：『壺井栄全集2』、文泉堂出版、平成9年

判型：幅133.5×高さ195mm イラストレーション：吉田美紅



図4『やぶかんぞう』

底本：『小さな花の物語』、平凡出版、昭和32年

判型：幅165×高さ276mm イラストレーション：池之上まゆ

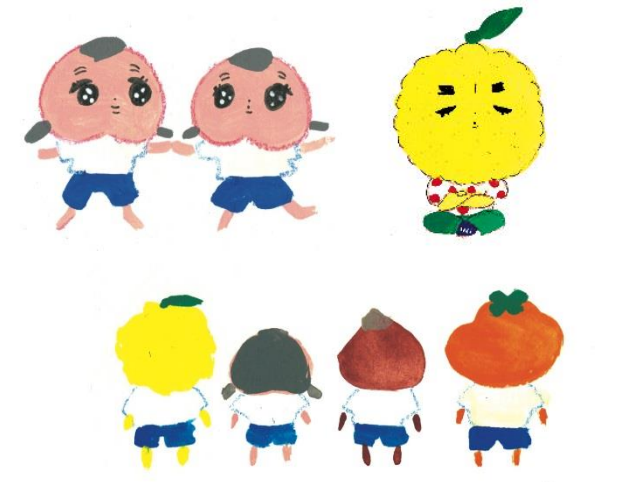


図5『柚の大馬鹿』

底本：『柚の大馬鹿 随筆』、実業之日本社、昭和34年

判型：幅210×高さ297mm イラストレーション：崔 琴美

神戸での展示

神戸展では、東京展・小豆島展で制作した書籍が「かたち」になるまでのプロセスを展示・公開した。出展者全員に、これまでの取り組みを振り返ってもらい、思考を整理する機会をつくった。制作する過程で生じたさまざまな背景を、フォーマットを設定せずに、各々の視点から再構成してもらった。具体的に言葉にしていけることで、「今つくる、本の形」という展示テーマが、より来場者に伝わることを目指した。



図6 会場風景

日時：2017年3月7日～16日

展示場所：SANSEIDO GALLERY

企画者：萩原小麻紀

出展者：今垣知沙子 竹石ちか 萩原小麻紀
樋笠彰子 守屋史世

回遊展について

会期中、神戸で営業する古書店5店舗から協力を得て、制作した壺井作品を「1店舗につき1冊」置かせてもらった（協力店舗：エメラルドブックス、口笛文庫、1003、トンカ書店、古本屋ワールドエンズ・ガーデン）。

会場配布用冊子

それぞれのお店を巡っていただくと、今回制作した本の写真と、情報が記載されたカードを持ち帰ることができる。全6種類（本会場+古書店5店舗）あり、お店ごとにデザインが異なる。全部集めると「書店回遊記録集」ができあがるという趣向となっている。実際に書店とギャラリーとを巡ってくださった方もおり、会期中に交流が生まれた。本を介してコミュニケーションが生まれること、その重要性を感じることができた。

まとめ

神戸の展示を終えて、今回のような企画を実施するにあたっては、成果物の本を並べるだけではなく、出展者自身が会場に在廊し、来場者に説明をする必要性を強く感じた。お互いに交流することにより、出展者自身はダイレクトに本の評価を受けることができる。来場者は普段は意識され

ないブックデザインのプロセスを知ることができ、作り手の顔が見えることにより、さらに物としての本の魅力が伝わると話してくれた。今回は本の販売は行わなかったが、今後は複数部制作し、神戸からさまざまな本を発信、販売するまでを実践したい。



図7 会場マップ



図8 書店回遊記録集（判型：幅128×高さ188mm）